

「気づき」の意味論的・身体論的 定義による教育実践分析

柳瀬陽介
(広島大学)

パネル・ディスカッション「気づきを促す英語の授業とは？」
2015年9月12日(土)VELC研究会

お詫びとお断り

- 本日は発表時間が短いのでとても直観的な説明だけします。
- 早口になったらごめんなさい。
- 実践についての言及が少なくなります。
 - しかし、私たちが使うことばの定義をしっかりとっておかないと、話し合う意味は薄くなるのではないのでしょうか

SLAでの「気づき」定義への疑問



コーディネーターからの質問

Q: パネリストの先生がご提案で使われている「気づき」は、SLAの「気づき」と同じか、違うか。どこが同じでどこが違うのか。

A: **違います**。SLAの「気づき」概念がよく理解できません。

Ellis (2008)定義への疑問

(望月資料参照)

- Registering **formal features** in the input ... how the input ... differs from the output...
 - ➔ Formについてだけの概念なのか？形式を通じて喚起される「意味」こそは気づきの対象ではないのか？
- **Essential** process in L2 acquisition
 - ➔ 「気づき」がなくても習得は起こることは既に立証されている。
“Give me a can of beer”
白井恭弘 (2008)『外国語学習の科学 - 第二言語習得論とは何か』岩波新書
 - ➔ **Mindの機能の大半は無意識的なもの**というのが科学的常識
 - ➔ Noticing Hypothesisは “I notice therefore I learn” といわんばかりの**意識偏重の考え方**
Atkinson (2012) *Alternative Approaches to Second Language Acquisition* (Routledge)

米山 (2001)定義への疑問

(望月資料参照)

- 「意識的な過程で、気づいた特徴をことばで報告することができる状態」

→意識していることと、それをことばで報告できることは別のこと

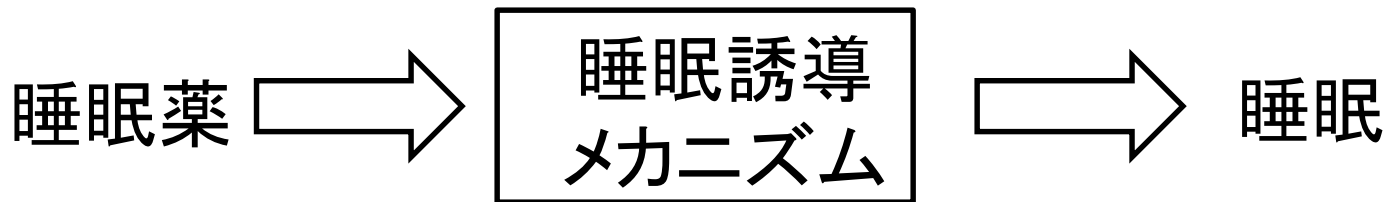
そもそもこの定義はEllis定義とも異なる

→また「ことばで報告」といっても、どのレベルの言語報告なのかが曖昧でわからない。その「ことば」がどんなことばなのか千差万別なはず(例、「何か変」という日常的表現と「複数形のsがついています」という言語学的表現は異なる)。

Intake説への根本的な疑念



「INTAKE（あるいは「中間言語システム」）が言語習得を可能にする」という説明は



昔から批判されてきたこの「説明」とどのように違うのだろうか？

村野井 (2012)定義への疑問

(望月資料参照)

- 「気づき→理解→内在化→統合」という流れ
→「内在化」も「統合」もない「理解」という概念が、
それこそ理解できない。
 - 「理解」の常識的定義は、例えば「物事の道理や筋道が正しくわかること。意味・内容をのみこむこと」(デジタル大辞泉)。村野井の「理解」概念は、この常識的定義とそぐわないのではないか。
 - カント、ハイデガー、ルーマンにおける“Verstehen”概念から考えても納得できない

- 実は私は、昔、Schmidtを読んでみたが、哲学や認知科学の意識論との整合性があまりになく、Schmidtが言っていることを正直理解できなかった。

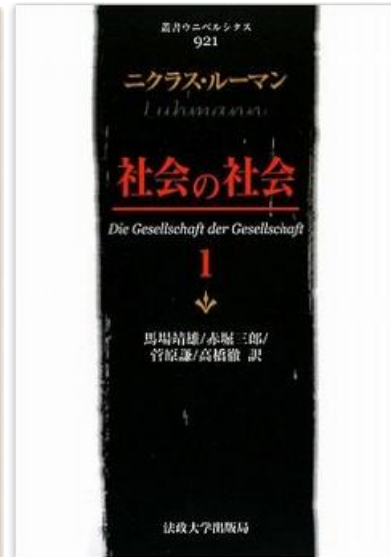
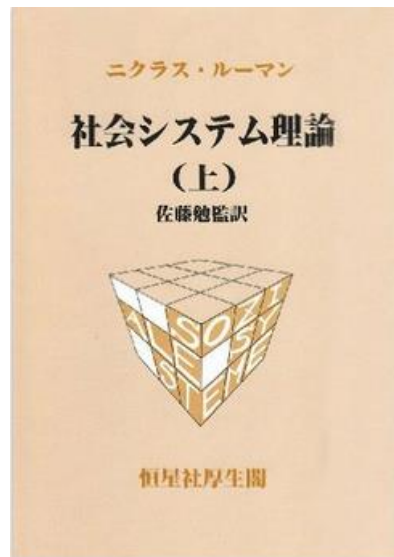
➔ ルーマンの哲学的意味論(社会学)とダマシオの身体論(神経科学)を援用して、整合的な「気づき」概念を定義したい。



ルーマンによる「意味」の定義

ニクラス・ルーマン

Niklas Luhmann (1927-1997)



顕在性

潜在性

意味の地平

意味の**顕在性**ばかりに注目する 中高の英語教育

- “What color is this?”といった発問ばかりの中
高の英語教育。
- それでは子どもが飽きる(=**意味を見出せない**)ことに気づいた小学校教師の発問
- “What color is spring for you?”
- 文の意味の**潜在性**こそが重要！
- **顕在性**だけの認知なら**知覚**。
- **顕在性と潜在性の統一**が理解

岩波ブックレット No. 922

小学校からの 英語教育を どうするか

柳瀬 陽介
小泉 清裕

無味乾燥な知識伝授ではなく、
子どもたちの心を揺さぶり、
自然にことばを発したいと
思わせる授業のために



わかる、使えるくはじめの1冊
岩波ブックレット

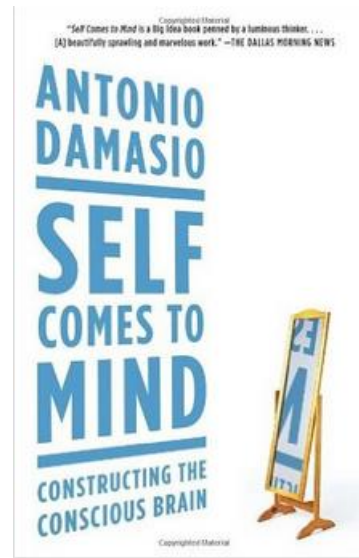
定価(本体520円+税)

A close-up photograph of two persimmons hanging from a branch. The persimmon on the left is green, while the one on the right is yellow-orange with a dark, possibly damaged, area on its side. They are surrounded by vibrant green, elongated leaves. The background is a soft-focus green, suggesting more foliage.

ダマシオの身体論
(の翻訳的解釈)による
「からだ」「こころ」「あたま」「想い」



アントニオ・ダマシオ
Antonio Damasio (1944-)

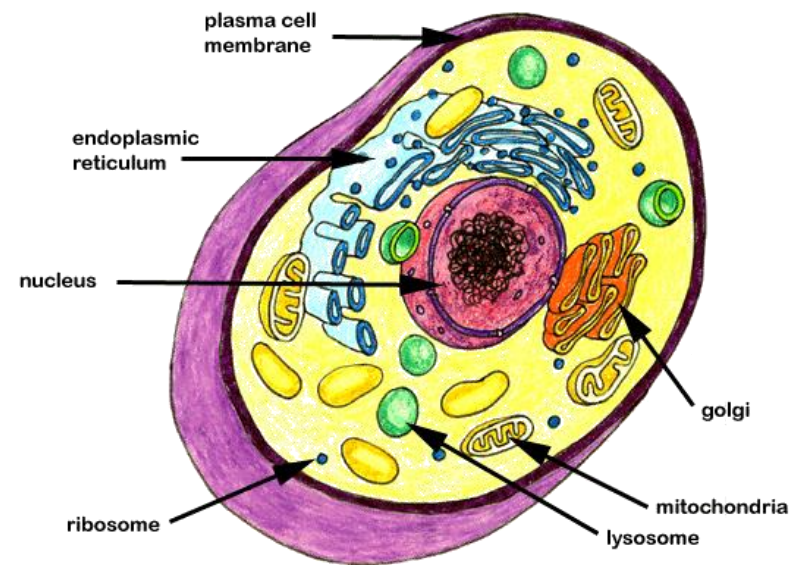
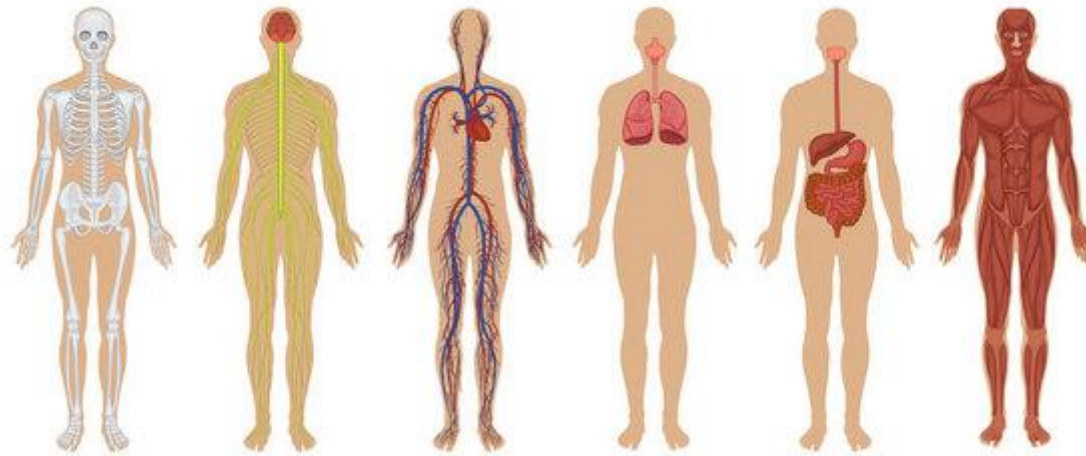


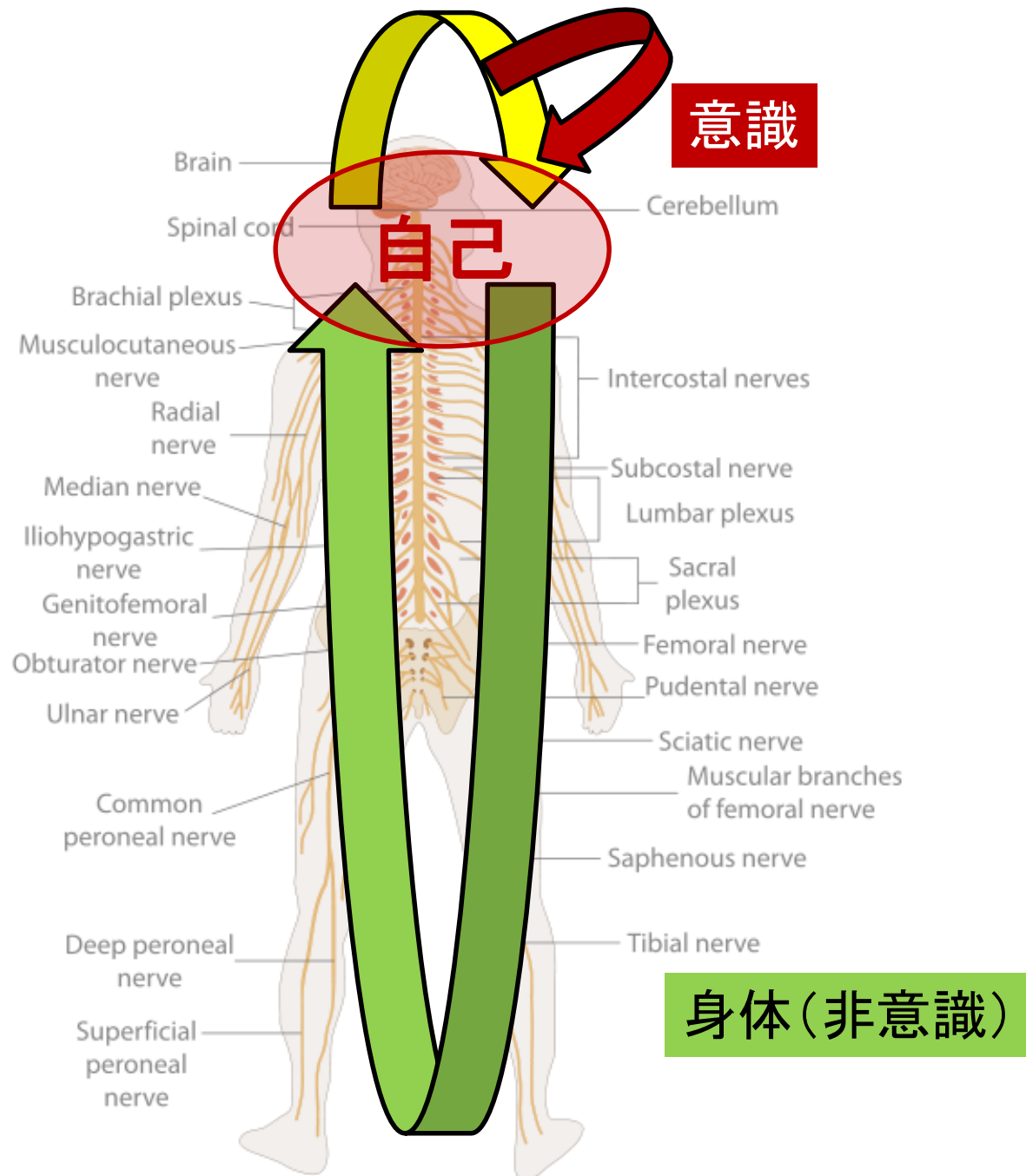
<http://yosukeyanase.blogspot.jp/2012/12/emotions-and-feelings-according-to.html>

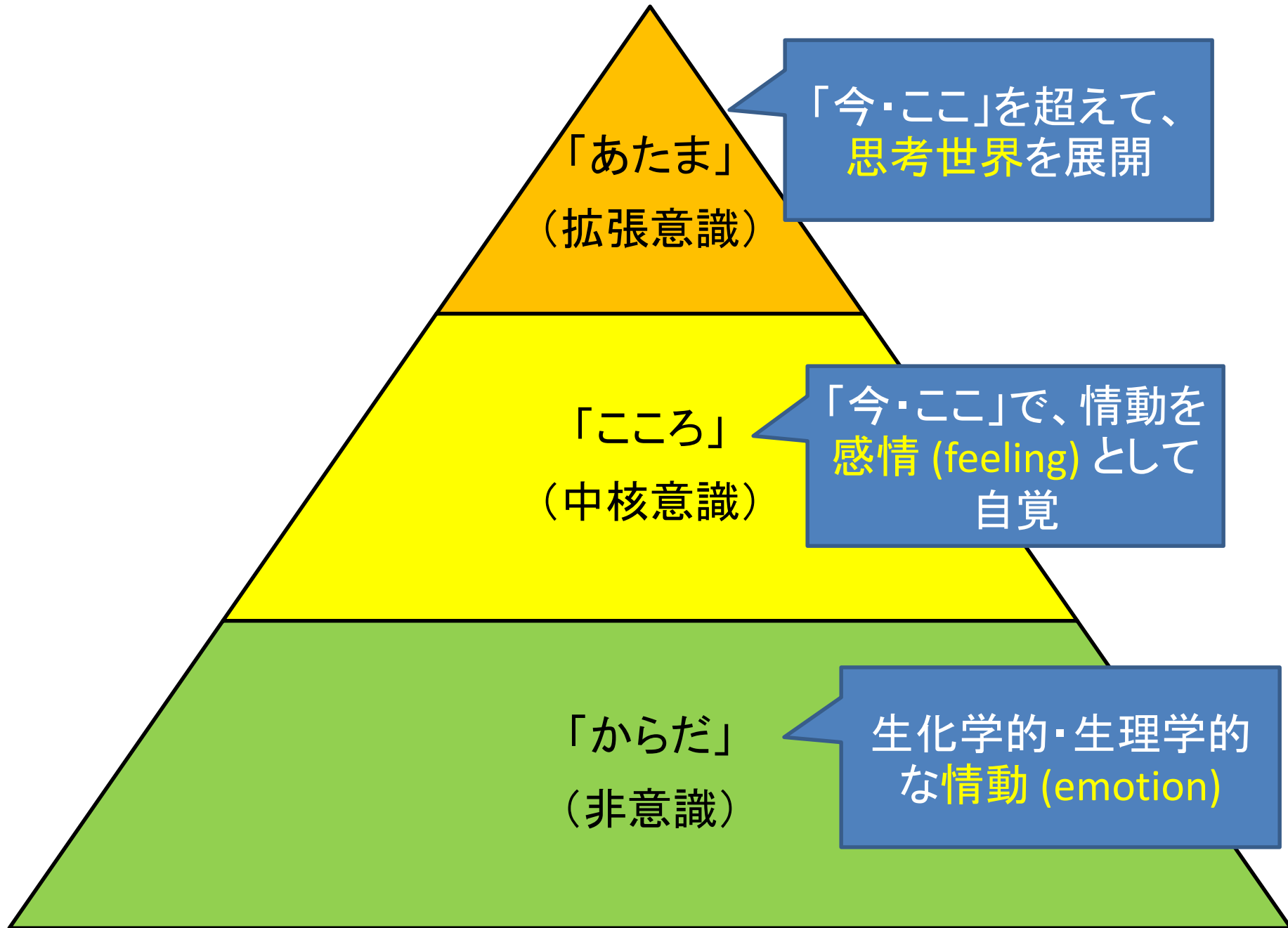
「からだ」・「こころ」・「あたま」

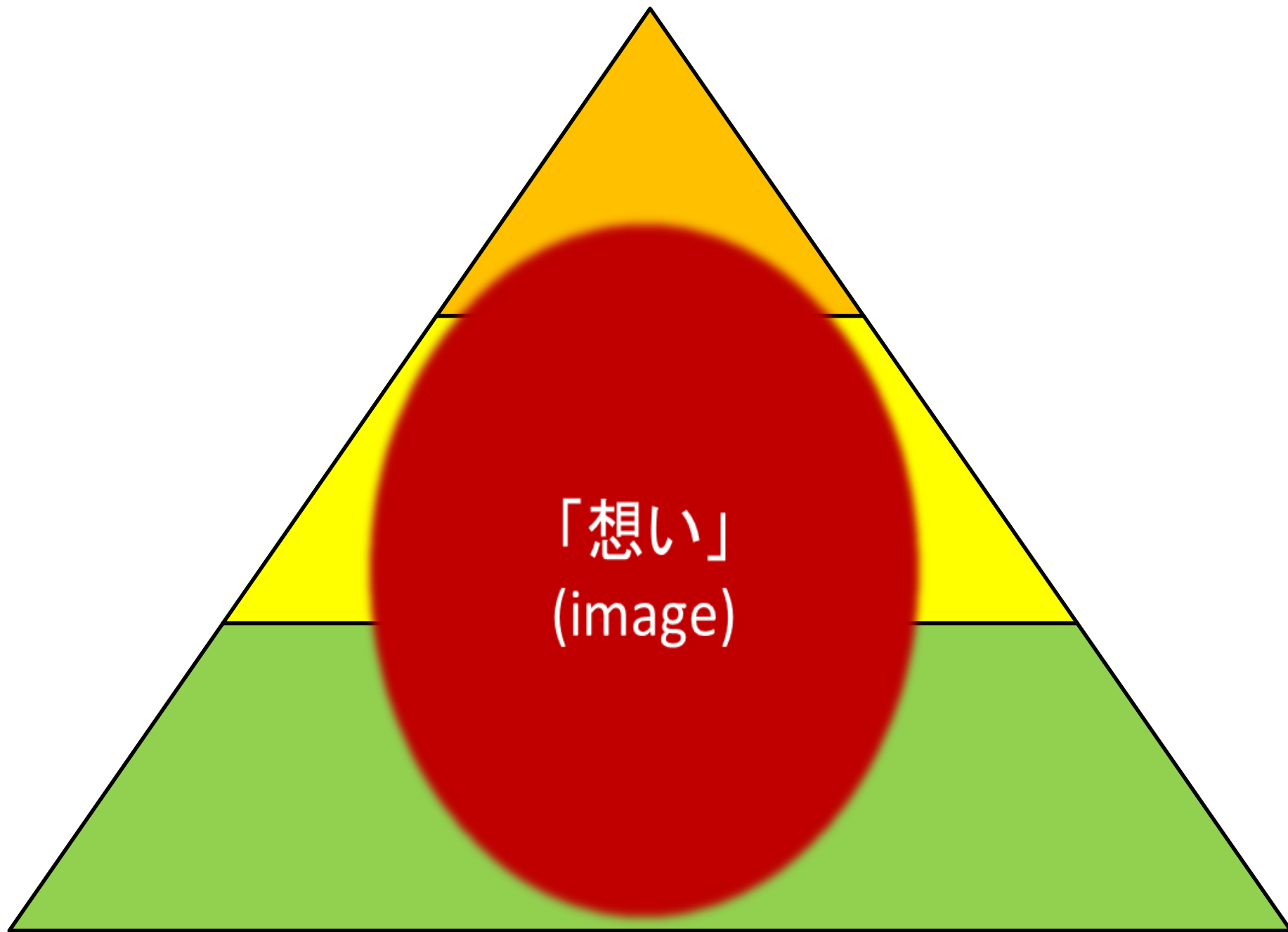
が統合されていなければ
知性も言語もありえない





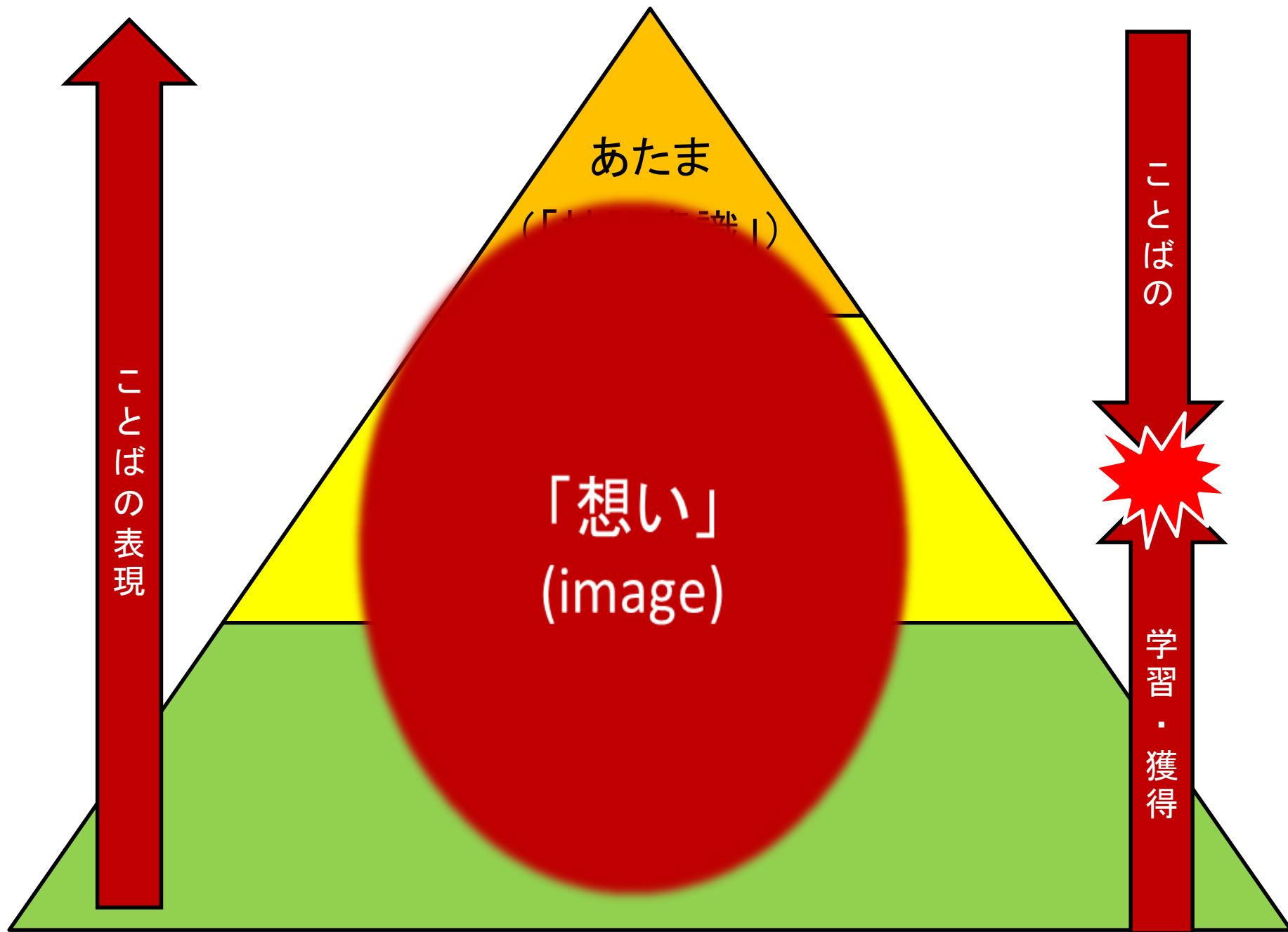


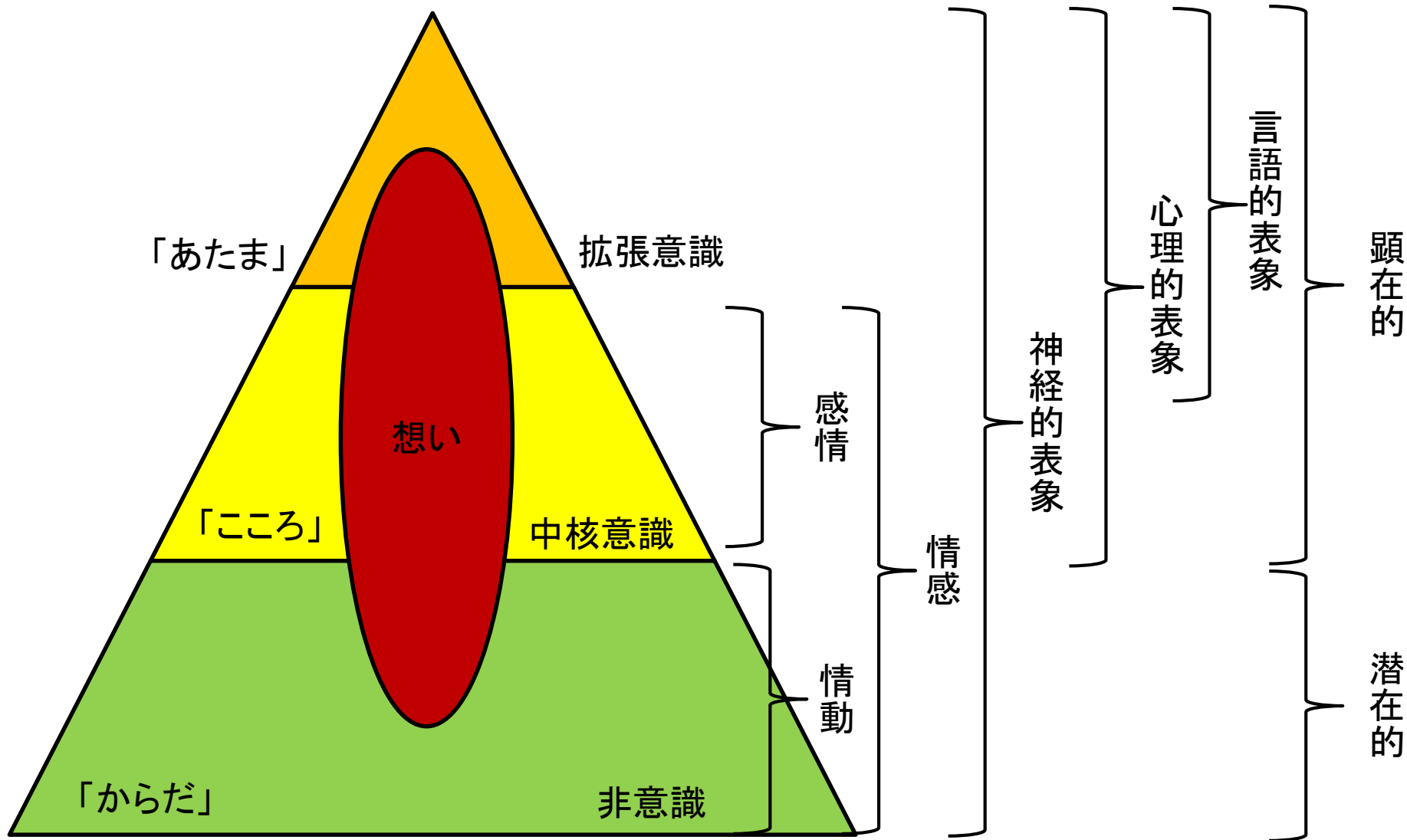




ダマシオの言語論

- 物体・出来事・関係・推論を表す非言語的な想いが変換(翻訳)されたものである。
- Language -- that is, words and sentences -- is a translation of something else, a conversion from nonlinguistic images which stand for entities, events, relationships, and inferences. (Damasio 2000, p. 107)





日常表現		心理的表現			表象性			顕潜性
あたま	想い	拡張意識					言語的 表象	顕在的
こころ		中核意識	感情	情感		心理的 表象		
からだ		非意識	情動			神経的 表象		潜在的

日常表現	心理的表現			表象性	顕潜性	
あ	拡張意識			米山定義 は心理的 表象と言 語的表象 を混同	顕在的	
	口核 意識	感情	情感			心理的 表象
Schmidt/Ellis定義は非意識を軽視					潜在的	

Intake説は、知性(mind)の階層性を説明していない。

米山定義は心理的表象と言語的表象を混同

Schmidt/Ellis定義は非意識を軽視



「気づき」の三段階

定義提案：気づきの三段階

1. 「からだ」での気づき

- － 対象の顕在性を知覚しているが、その**潜在的意味がわからず**、十分に意識できていない状態

2. 「からだ・こころ」での気づき

- － 対象の意味がわかり(＝意味の顕在性と潜在性が統一され)、その**意味理解から想いが**(心理的に)生じた状態

3. 「からだ・こころ・あたま」での気づき

- － 想いが拡張的に展開され、**さまざまな事例に適用**できる状態

二つの事例での 三段階の気づき (言語学的説明の不在)	大津報告 (アクセントについて)	池亀・竹田実践 (名詞の可算・不可算性 について)
「からだ」での気づき	「あめ」に戸惑う	複数形態素の存在・ 不在に音声的に気づかせ、 可算・不可算概念があることを 予め告げる
「からだ・こころ」での 気づき	「あめ」に「違うよ」と 反応	エピソード化と演劇的表現で 可算性と不可算性を実感させる
「からだ・こころ・あたま」 での気づき	「これは『かめ』だよ」と 冗談	ジェスチャー化やオノマトペ化 を通じて、他の名詞についても 考えさせる
言語学的説明		

まとめ

- SLAでの「気づき」定義には問題が多いので、新たな定義を提案しました。
- **気づきの対象を、(メディア・形式を通じて喚起される)「意味」**として定義する必要があると考えました。
- さらに気づきを、「からだ」、「からだ・こころ」、「からだ・こころ・あたま」の三段階で定義しました。
- この定義は、**事例・実践**をある程度説明できると思っています。



ご清聴ありがとうございました

yosuke@hiroshima-u.ac.jp